

# 画証へ釣狐

— 狂言記と浄瑠璃・歌舞伎の画 —

田口和夫

狂言の研究、というより、芸能一般の研究

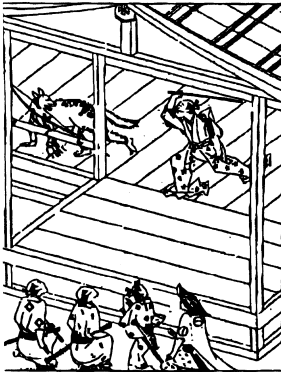
究についての嘆きは、後白河法王が梁塵秘抄口伝集の中で、「声技の悲しきことは、我が身崩れぬる後、留まる事の無きなり」と述べる様に、舞台の声・姿がその時限りで消え去ってしまう事である。近代になって、映画・ビデオにその姿を留める例は多いけれども、古い時代の舞台は、僅かに絵画の中にその姿をしのぶのみである。しかし、その検討はまだ充分であるとは言えない。

私は以前、畏の前に佇む法衣姿の狐を画いた北斎の狐図、北野天満宮蔵「釣狐図絵馬」、河鍋暁斎筆「能狂百図」を取り上げて、それらは驚流に伝承される演出による舞台を画いたものであることを考えたことがある。

鴻山文庫には英一蝶原画という「狂言画巻」と林憐写「狂言図」（文久三年）という二巻の狂言画があり、両者とも「釣狐」の図を取めている。これは現行につながる狂言の舞台を描いたものなので別に考える機

会がある。

一般によく知られている「釣狐」の画としては、狂言記「こんくわい」の挿画がある。新日本古典文学大系『狂言記』で見ることのできる挿画は万治三年版のものだが、ここでは二面の挿画がある。一枚目は伯藏主に獵師が畏の鼠を差しつけている場面だが、伯藏主は面を着けていないようである。二枚目には問題があるのでここに掲げる。



これは畏にかかった狐が橋懸りへ逃げ、獵師が杖を振り上げて追っている場面である。現行演出との大きな相違は、狐が畏を

首に懸けたまま逃げているところである。

知られる限りではこの様な演出はない。現実に大藏・驚・和泉三流の舞台を見ている読者からすれば、この図柄は嘘としか思えない筈である。万治三年版狂言記では挿画二面の曲は「こんくわい」・「花子」の二曲だけである。特別の曲と考えられていたためと言えるのだが、その一枚に虚構があるというのも考え難いことである。これには実際の裏付けがあったと考えたい。この二面の構図が元禄十二年版狂言記では一枚に収められる。次の図である。



これには異事同図というべき無理がある。舞台上では万治版一枚目と同じ場面が展開され、鼓座（後見座）から狐が出て来ようとしている場面が併せられているのである。この度、芸能の表現を問う小さなシンポジウムに参加する機会があったが、文教大学の同僚平田澄子氏の浄瑠璃・歌舞伎における狐の表現についてのお話が興味あるものであった。提示された資料の中で、新潮古典集成『浄瑠璃集』に引く『釣狐』の画が殊に面白かった。次の図がそれである。



元禄十五年上演かという『傾城八花形』に「段切の景事」として付けられた「風流信太妻」の一場面という。これは古浄瑠璃「しのだづま」の「やつし物」との事で、

〈釣狐〉部分の本文は文飾は多いものの古浄瑠璃と共通点が多い。

安倍の童子の母（狐）が信太の森へ帰ろうと道行き途中、獵師の張った狐罟を見付け、「もの思ふ身を打ち忘れ、草に平伏し雲に音を鳴いつ。笑うつあくがれつ。行きつ戻りつ竹みつ」という様に心惹かれ、「袖をかざせ」ば狐の姿となり、「狩人さまさまま手を砕き。心を砕き身をもがき、術を尽くせど掛からばこそ。かへつてわなにおし入れて、跡を見返りうれしげに。信太の森の草隠れ、入りて姿はなかりけり」ということとなる。この挿画は獵師を罟に押し入れた場面である。画の中の説明によれば、手づま人形を遣っているのが辰松八郎兵衛、浄瑠璃は竹本筑後掾、竹本頼母、三味線引がいて、罟の中に尾の出た「かりうと」がいる。女姿の襟のところから狐が半身を出して獵師を化かし、獵師が狐になりかかっている。罟には鼠と鳴子が付けられている。見たところ罟には縄は付けられていない。そういうえば万治版狂言記の挿画の狐の首に掛かった罟にも狐を引き寄せる縄は付いていないようである。これらは同様の仕掛けと見られるのではなからうか。もう一つ、現行の演出と異なる要素は、舞台奥に置かれた「いほり（庵）」である。大蔵和泉両流ともこれに当たる記述はないが、鷺流の

台本には存在する。この曲の鷺流最古の台本は宝暦名女川本の『釣狐』二種だが、その甲本（享保九年本）では獵師がまず登場し、出先で罟を掛けて「小屋へ入てやすまふと存る」と言うのである（賢通本では「稲室」）。注記によれば実際に小屋は出しているが、セリフにある以上は、実際に小屋へ庵の作り物が出されることもあったであろう。その演出を知ってこの画の庵をみると、同じ物と考えられるのである。鷺流の『釣狐』は京流・南都祇宜流の影響下に成立した、という説は信憑性があるものだが、そのような群小狂言流派の演出が、このような画証となっていると考えられよう。

狂言記の挿画と若衆狂言・若衆歌舞伎との類似はすでに説かれていることだが、狂言プロパーの画だけではなく、歌舞伎・浄瑠璃の画まで視野にいれて狂言の歴史を考える必要がある。一度、そのような画のすべてを通観して、それぞれの時代と流派を明らかにしてみたいものである。

（文科大学教授 法政大学能楽研究所所員）